

2016 年度全国スキー協会の技術部会に向けたレポート

【1】はじめに

東京スキー協の教育技術局メンバーの一人として 5 年ほど前から福島自身は活動に携わってきたが、教育技術局長の近藤氏の病気引退により 2016 年 6 月から福島自身が東京スキー協の教育技術局長として活動を始めた。

東京スキー協の理事は 4 つの局に配置されるが、教育技術局は 11 名で構成され、東京スキー協の教育技術に関する責任部署として、指導員登録、研修会の設定と計画書／報告書の作成（関東ブロックを含む）、外部からの指導員派遣要請対応などのルーチンワーク的な業務の他に、1）（100 名を超える指導員を主な対象者とした）スキー技術レベルを上げるための組織的な活動、2）後継者を創る意識的な活動、3）会員のレベルアップを図る活動、などを原則月 1 回の教育技術局会議にて議論の上で計画立案し、オンシーズンのみならずオフシーズンも含めて実践してきた。本報では、上記の 1）と 2）に関することを主に報告する。

なお、今期の東京スキー協教育技術局のスローガンは「早く、速く！！」とし、何事も早く決めて速く周知し早く速く準備することとした。また、局員の落ちこぼれをなくすために、会議の開催通知と議事録の発行を必ず行うことも意識的に行ってきた。

【2】（100 名を超える指導員を対象者とした）スキー技術レベルを上げるための組織的な活動

(1) 量から質への転換

2012 年から指導員の研修修了率を上げるために、研修修了状況をまとめたうえで「指導員が研修を受けることが最低限の義務」であること会員向けの東京スキー協通信や指導員向け通信である「スキーリーダー」あるいは各種会議等で訴え続けるとともに、指導員ごとに状況を通知したり、9 月のスキーセミナーの中でも紹介してきた。活動を開始して 5 年が経過し、表 1 に示すように東京の指導員の研修修了率のアップが図られてきた（37.0%⇒63.7%）。今後もこの活動は継続しつつ、今期からは「量から質への転換」を加えるべく、以下の(2)から(8)の 7 点の活動を主に実施してきた（一部は前年度より実施）。

表 1 東京スキー協スキー指導員の研修修了率の推移

			2016年		2015年		2014年		2013年		2012年	
理論	基礎	応用	人数	率	人数	率	人数	率	人数	率	人数	率
理○	基○	応○	65	63.7%	60	61.9%	53	52.5%	50	47.2%	40	37.0%
理○	基○	応×	4	3.9%	3	3.1%	4	4.0%	18	17.0%	35	32.4%
理○	基×	応○	6	5.9%	12	12.4%	12	11.9%	8	7.5%	1	0.9%
理×	基○	応○	3	2.9%	3	3.1%	2	2.0%	0	0.0%	0	0.0%
理×	基×	応○	6	5.9%	8	8.2%	9	8.9%	6	5.7%	8	7.4%
理○	基×	応×	4	3.9%	2	2.1%	6	5.9%	3	2.8%	4	3.7%
理×	基○	応×	1	1.0%	1	1.0%	3	3.0%	3	2.8%	0	0.0%
理×	基×	応×	13	12.7%	8	8.2%	12	11.9%	18	17.0%	20	18.5%
休止者除く			102		97		101		106		108	

(2) 指導員研修会で指導員全員が STT を受けて自身の技術レベルを認識する活動（新企画）

関東ブロックではシーズン 2 回の「基礎技術研修会」を実施しているが、その 1 回目の 12 月の研修会で指導員全員が STT を受けて自身の技術レベルを認識することを初めての試みとして行った。

受験者は初級指導員 14 名で、平均で 65 点以上が 5 名（最高は平均で 68.9 点）、65 点未満が 9 名（最低は平均で 63.2 点）であり、65 点未満であった指導員はショックを受けていたことも事実である。

滑走能力面からの主な課題は、①ポジションが常に後ろ、②切替のポジション（教程で言えば内向傾のポジション）に身体を持ってこれないこと、③外脚で雪面をとらえられない（ストレート内倒）ことによる暴走、の 3 点であり、スキー協指導員あるいはそれを目指す方々の全国的な課題がそのまま表れていた。

受験生の感想として、「STT で自分の滑りを反省し、今後に活かしていきたいです」、「始めて STT を受験しました。勉強になりました」などがあがったが、上記の課題を認識していただくことと課題修正のための方法を提示していくことがこれからの課題である。

(3) 映像を使った基礎技術研修会での「技術の目合わせ」の実施

基礎技術研修の必須項目である「技術の目合わせ」を、関東ブロックでは中央研修会での目合わせをビデオ撮影／編集した DVD を用いて、研修初日に宿で座学形式で実施している。基礎技術研修に参加しているほとんどの指導員は STT 採点員や指導員検定員を行うわけではないが、指導員として生徒を受け持つときの「見る目」を養うという観点から重要なことと考えての実施である。

プリントした採点表をあらかじめ用意して、指導員各自が DVD 映像を観て 30 秒以内に点数を周りと相談せずに記入し、中央研修会で出される点数との差を認識していただき、「その差はなぜか」ということを中央研修会での荻原局長の解説を聞いてもらい理解していただくようにしている。そのうえで全体ディスカッションも行い、指導する際の「見る目」を養うようにしている。来シーズンも継続して実施していきたい。

研修会参加の指導員からは「目合わせの中で、ポイントの説明があり勉強になりました」など映像を使った「技術の目合わせ」という取り組みは好評であった。

この DVD は、大阪、京都、滋賀の各スキー協から要望をいただき配布させていただいた。

(4) 応用技術研修会でのプログラムの工夫

関東ブロックでは基礎技術研修時に応用技術研修も設定している。1 回目の 12 月の研修会では、(2) で述べた STT での課題である①ポジションが常に後ろ、②切替のポジションに身体を持ってこれないこと、③外脚で雪面をとらえられない（ストレート内倒）ことを解消するために、「ターンは外脚に始まり外脚に終わる」という（極端な）テーマを設定し、9 つの内容のバリエーショントレーニングを実施した（内容は国体群馬アルペン代表の青木さんより 2015 年度に伝授いただいた）。1 つのバリエーショントレーニングを 3 本滑ることで各自が確認する形式で進めた。

この研修を受講した指導員からは、「バリエーションは、シーズン初めということもあって、自分の滑り、今後の教室での指導にも活かせるもので良かったです」という感想が提出された。

(5) 基礎技術研修会でのベーシックパラレルターンの再検証の講習内容の整理

現教程が発行されて 13 シーズンが経過したが、指導員の教程に対する理解は当初よりはましになったと感じてはいるものの、例えば「ベーシックパラレルターンのなかで内向傾ターンはどう使われていますか？」と研修会時に質問してもしっかりと答えられる指導員がほとんどいないということも実態です。また、昨秋のスキーメイト No.166 に福島が書いたように「形だけ真似する」指導員や指導員受験者が多いことも事実と思います。メイトで触れたように「ひとつひとつの動作には意味があり、それ（本質）を理解することが大切」と考えています。

2015 年度の指導員研修会の講師活動から、ベーシックパラレルターンは①内向、②内傾、③開きだし、④足裏（内足裏）切り替え、⑤逆前後差で構成されているというシンプルな伝達を行っています。それぞれにより「なにが起こるのか」を伝え、それがどうつながっていくかを意識して伝えるようにしています。

今期はそれに加えて、前後のポジションを意識していただくこと、雪面をとらえたあとに外板をたわませていくこと（ストレート内傾は NG）がポイントであることを強調してきました。ベーシックパラレルターンは「体軸の切り替えから外向傾によるパラレルターン」と呼ばれていますが、上記の①～②で軸が切り替わって③で雪面がとらえられたあとに外向傾を意識しないとストレート内傾になりやすく、雪面をとらえたあとに外板をたわませてターンを進めていくことを意識していただくことが暴走にもつながらずに効果的であると改めて感じました。

また、⑤の逆前後差を意識していただくことで内足の緊張感と外板の走りが生まれることを研修の講習で確認することができました。改訂される教程でも「逆前後差」は重要なポイントだと思います。

(6) 東京スキー協技術部の確立と技術部員を意識させた活動（新企画）

東京スキー協では従来より技術部を組織してきました。その目的・役割は以下のとおりです。

- ① スキー技術全般、特に全国スキー協スキー教程の研究を行い理解を深めるとともに、東京スキー協会員に対しての普及に努める。
- ② 指導員養成に関する行事を企画し、それに参画して受験者や対象クラブへのアドバイスを行う。
- ③ 指導員研修に関する行事を企画し、それに参画して受講者や対象クラブへのアドバイスを行う。
- ④ 一般会員の技術向上に関する行事を企画し、それに参画してアドバイスを行う。
- ⑤ クラブからの技術相談の窓口となり、クラブ員の技術向上に協力する。
- ⑥ 新たな技術部員の創出と成長を促すための活動を行う。
- ⑦ 全国スキー協スキー教程に関する意見集約・まとめの活動を行う。
- ⑧ 自らのスキー技術の研鑽に努め、以上のことを行うための技術部会に積極的に参画する。

技術部としての目的・役割を果たすと同時に、今後の東京スキー協の発展を支える人材を育成するために、経験豊かな指導員と新鮮な人材をバランスよく配置できるよう考慮し、クラブからの部員選出などで現在 10 名の技術部員で技術部が構成されており、出崎理事長を部長として、今期は、継続的な活動を心がけ、以下のことを実施してきました。

I. 座学の場合

- ① 第 1 回部会：9/24（土） 出席 7 名

午前中にミーティング後、午後からの「スキーセミナー2016」で荻原さんの講演を通して教程改訂のポイントを、福島の話を通して指導員の役割や安全等について学ぶ

② 第2回部会：10/22（土） 出席8名

(7)で報告する「指導員ミーティング」に参加し、指導とは？ 全般を学び／経験交流することにより、自分の指導に関する気付き／反省を得て、今後の指導に活かす

③ 第3回部会：2017/5/27（土）

第2回指導員ミーティング

II. 雪上の場

① シーズンイン合宿：12/10（土）－11（日） 4名参加

東京スキー協競技委員会主催のポールを使わないフリーキャンプ（田代スキー場）に参加し、外部講師による部員のレベルアップを図った。それに加えて外部講師の教え方／考え方を学んだ。講師は、SAJ中村浩章さん（2017技術選決勝108位）、八木さん。終了後に4名の参加者からレポートを提出いただき、教育技術局員と技術部員で共有した。

② シーズンファイナルキャンプ（独自の雪上部会）：4/1（土）－2（日） 7名参加

志賀一の瀬。初日：技術の確認（テーマ「ベーシックパラレルターンの再検証」講師：福島）、宿舎にて シーズンでの講師活動からの問題意識の交流、技術部員の任務（役割）の議論
2日目：教程改訂経過/内容の雪上での中途報告（報告者：教程制作委員（小川、出崎、福島））を行った。

(7) 「指導力のレベルアップ」を図るための「指導員ミーティング」（新企画）

東京スキー協は新しい指導員を創出する活動は積極的に行ってきたものの、認定後の指導員（講師）活動で直面する様々な悩みや疑問をフォローしたり経験交流する場がこれまでなく個人任せになっていた。意欲を持って指導員となった「経験年数の少ない指導員」の指導力向上は、クラブやスキー協の組織的な強化や信頼からも必須であることから、指導員（講師）活動で直面する様々な悩みや疑問、指導上の工夫などを経験交流し、指導力向上の一助としていただくための初めての企画「指導員ミーティング」を10/22（土）に15名の指導員の参加で開催した。

指導員ミーティングの前半で、福島から「指導するってどういうこと（生徒さんの滑りを観て、その方の滑りのどこが弱いのかを見つけ、その原因を考えたいうえで、滑りを変えていくための方法を具体的に提示／レッスンし、生徒さんの滑りを変えてこそ指導員ではないか）」を以前に作成したDVDを使って問題提起し、ケーススタディ（事例研究）を行なった。

後半では、参加指導員から指導上の悩みや疑問、また指導上の工夫などを出し合ってもらった形でフリーディスカッションでの経験交流を行った。

参加者からは積極的な感想が寄せられ、5/27（土）に2回目を実施する。

(8) 「3つの研修を期限内に修了していること」を指導員派遣条件とした運用（実質 新企画）

東京スキー協には外部団体からの指導員派遣要請に対して指導員を募り派遣をしてきた。数年前からスキー協として指導員を派遣するために「3つの研修を期限内に修了していること」を最低条件とすることを表明してきたが、それをチェックすることは曖昧になってきていた。曖昧さを解消すべ

く、今期はある団体への派遣にあたって研修修了状況をチェックしたところ、未研修者がおり、その方には事情を説明し派遣指導員から外れていただいた。

また、昨シーズンまでの派遣では指導員の参加者の安全等への配慮に欠ける行動、指導員の役割を忘れた言動などが散見されることが報告されてきた。スキー協という組織への信用を失ったり、行事に参加した方々がスキーそのものに良い印象が持てなくなることになることから、派遣にあたっての注意（自覚）事項の配布を行った。

【3】後継者を創る意識的な活動

東京スキー協も「高齢化」が顕著であり、教育技術面の（今よりも）若いリーダクラスを複数名創るための活動を意識的に行っていくことが重要であると認識している。

そこで、今期は3名の若手？指導員（45歳～50歳、うち2名は女性）に東京スキー協主催の「2016テクニカルフェスタ」の一般会員のレベルアップコースの講師として活動していただいた。そのうちの1名は1年前からアシスタントとして先輩の講師について活動を学んでいただき、また(7)で述べた指導員ミーティングでのディスカッションなどによる事前準備、行事時や行事後のフォローなどを行った。

3名の若手指導員は参加者から好評であり、「来シーズンも機会があれば講師を行っていききたい」と述べており、指導力も含めたレベルアップを継続的に働きかけていきたい。今後は、若手指導員や指導できる指導員の層を厚くする活動を強化していきたい。

以上